

資本主義は嫌いですか

それでもマネーは世界を動かす

竹森 俊平 著

日本経済新聞出版社

評者

専修大学経済学部教授

櫻井 宏二郎



経済学者の書く文章はつまらないと相場が決まっている。緻密な論理を積み重ねるといふ学問の性格上これは仕方のないことなのかもしれない。しかしその結果、本来多くの人に読まれるべきものが読まれていないとしたら、実にもったいない話である。この点、竹森教授は経済論壇で多大な貢献をなしているといえるだろう。ページを開くや否やぐいぐいと読者を引き込んでいく筆力、そして読者がまるでその場に居合わせているかのような臨場感を持ったドラマ風演出は、前著『経済論戦は甦る』でいかに発揮され、多くの読者を得たが、本書でも「竹森ワールド」は健在である。

しかし、こうした表現技法はあくまでも内容を際立たせるための演出であって、本書を推薦する真の理由は充実したその内容にある。昨年からのサブプライム・ローン金融危機については種々の解説本が出ているが、問題の本質に迫ったものは必ずしも多くないように思われる。1997年以降なぜ世界の各地でバブルが多発したのか、サブプライム・ローンはなぜこれほどまでの金融危機をもたらしたのか、流動性とは何かなどの根本的な問題に対して、本書は最新の経済学研究を巧みに対立させながら、鋭く切り込んでいく。こうした深い論考は、ジャーナリスティックな解説本と一線

を画すものであり、経済学の有用性を改めて感じさせてくれる。しかも内容は決して難解ではなく、一般読者にも理解できるように噛み砕いてある。登場する経済学者は、サミュエルソン、シラー、テイラー、ティロール、バーナンキ、カバレロ、ロゴフ、ラジャン、シン、サマーズ、フィッシャー、ブラインダー等々と、まさにノーベル賞クラスのオンパレードであるが、一流の経済学者こそ問題の本質を突いた明快な議論を展開するものだといわんばかりに、話はわかりやすく書かれている。

本書は3つの部分から構成されている。著者の言葉によればサブプライム危機をテーマにした「物語の三部作」である。第Ⅰ部「ゴーン・ウィズ・ア・バブル」は、サブプライム・ローンによる金融危機がなぜ起きたのか、その根本的な原因はどこにあるのか、をテーマにしたものだが、真の原因を突きとめるべく問題の核心へ迫っていく様は実に知的刺激にあふれている。サブプライム・ローンがプライム・ローンと異なって連邦政府の厳しい監督下になかったこと、証券化の過程で、モラルハザードの発生、リスク分散への過信、甘い格付けなどの問題があったことの説明は、どの解説本にも書かれていることだが、住宅バブルは果たして連銀の低金利政策によるものなのかに関する議論辺りから、内容は次第に理論的な深さを

増していく。第Ⅰ部の焦点は、住宅バブルの背景にある世界的な貯蓄・投資の不均衡が1997年以降の新興国の貯蓄超過によるものか、それともアメリカの経常赤字主導によるものか、米国の住宅バブルは果たして避けられたのか、バブルはどのような条件下で経済厚生 of 改善に貢献するか、といった論点である。不均衡の原因が新興国の貯蓄超過にあるならば、世界のどこかでバブルが起きることは避けられず、あるいは米国の住宅バブルは世界に（日本に対しても）高成長の恩恵をもたらしたとしてプラスに評価されることになる。一方、米国の経常赤字に原因があるならば、今後、経常赤字の縮小とドル安に伴って世界経済の減速という調整が行われることになる。今後の展望に関しては、著者はいくつかの論点を提示するにとどめ、強引な結論を導こうとはしていないが、ある程度の方向性は示唆されている。

第Ⅱ部「学会で起こった不思議な出来事」は、2005年8月にアメリカのリゾート地で行われたカンザスシティ連銀シンポジウムの実況中継である。ところどころ著者による専門的な解説が入るが、あたかも我々が聴衆として参加し講演者の

顔を目の当たりにしているかのような、臨場感あふれる描写である。「グリーンспан時代」と銘打って開かれたこのシンポジウムは、グリーンспан連銀議長の18年間の在職を記念したものであったが、そのセレモニー的な雰囲気には抗して、同氏の金融政策を暗に批判するシカゴ大学ラジャン教授の気鋭の報告などが目を引く。さらに講演者の何人かが、既に2005年の時点で金融システムに潜む危険性を察知し、この次金融危機が起きるとしたら何が原因で、どのような展開をたどるかということはかなり正確に予見していたことは、驚愕に値する。時価会計の停止、金融機関のインセンティブ報酬体系の見直しなど、注目すべき提案も多くなされている。

第Ⅲ部「流動性 - この深遠なもの」では、流動性不足と時価会計が危機の連鎖を生むメカニズムなどが考察される。

今回の金融危機で、海外の惨事がまたたく間に日本に波及するというグローバル化経済の怖さを、日本の中小企業も痛感しているものと察する。現下の金融危機の本質を知る好著として、本書を多くの人に薦めたい。